

授業談話データベースによる実態調査

－教師は生徒をどう呼ぶか－

小林 美恵子

1. はじめに

本稿は実際の授業の録音を文字化した資料に基づいて、教師の授業談話における生徒に対する呼びかけ（呼称）および自称・対称代名詞の実態について記述し、授業におけるストラテジーとしての意味について考察する。

本調査は2007年度日本学術振興会科研費補助金の助成を受け、2006年10月～2007年6月にかけて、首都圏の中学・高校教師30名に依頼して各1単位時間（45～50分）の授業を録音、文字化し、データベースとしたものである。協力者は20代から60代の男性16名、女性14名の計30名。授業時間はのべ46時間53分。データ化した発話総数は18,523レコード、うち教師発話14,226レコードであった。調査の概要については小林（2007・2008）に記した。

周知のとおり、日本語には従来男女それぞれに専用とされる言語形式が存在した。自称・対称代名詞を含む呼びかけ語などもそれにあたる。文末表現などにみられる女性専用形式の衰退がよく言われ、男女の話しことばは中性化し接近しているとも言われるが、その中で、「あたし」「おれ」「ぼく」などの自称代名詞は、若者ことばの一部などで特に男性専用形式への女性の側からの乗り入れはあるものの、相変わらず女性専用、男性専用に区別される形式を保っていると言えるし、これらとともに使われる対称代名詞「あんた」「きみ」「おまえ」にも概ねこの傾向は言えるだろう。いっぽうでこのようにステレオタイプ化された自称・対称を避けて呼ばないという選択もありうるし、相手に対しては名前で呼びかけるという選択もありうる。その名前についても、姓（ファミリー・ネーム）を用いるのか、名（ファースト・ネーム）か、また敬称（「さん」「くん」など）をどう使うのかなどが、選択の問題としてある。

教師は授業で生徒に受け入れられつつ、自己の主張（教材内容を含め）を

確実に相手に受け入れさせるという責務を負い、それを果たすためにさまざまな言語ストラテジーを用いていると考えられる。その選択に際しては、生徒との関係を保つために社会的に受け入れられる選択をする場合もあるし、より効果的に要求や説得をするために、あえて「常識」に反したことばの選択をする場合もあるだろう。また、ニュートラルな語や言い方の選択によって距離を保ったり、親しみの表出により生徒に受け入れられようとするなど、さまざまな可能性が考えられる。小論では生徒に呼びかけたり、生徒を指して言及する場合の名前の呼び方と自称・対称代名詞の様相について記述し、それらがどのような意図によって用いられているのかを考察する。さらにそのジェンダー的意味についても考えてみたい。

2. 「姓」「名」による呼びかけ

〔表1〕は「教師から生徒への呼びかけ（姓名）」をまとめたものである（次ページ）。

2.1 呼びかけの量

授業中に教師が生徒に対して姓または名、もしくはそれに敬称をつけた形で呼んでいる例は30人全部で774例見られた。1単位時間に平均25.8回（男性27.4回、女性24.0回）教師は生徒を呼んでいる。30人の協力者の授業に出席している生徒の延べ数は769人、1クラスあたり25.6人であるから、ちょうど1人の生徒が1単位時間に1度ずつ呼ばれているということになる。とはいっても30人の教師それぞれの生徒を呼ぶ回数にはかなりの差があり、最も多いものでは、単純数で70回（42人のクラス・男性261⁽¹⁾）、生徒の数に対する割合でいえば、2人のクラスで25回（1人あたり12.5回・男性221）というものがあるいっぽう、1度も呼ばないというものも4人いた（男性3、女性1）。概して男性のほうが、女性より生徒の姓名をよく呼んでいるようであるが、まったく呼ばないという授業も男性のほうに多い。

一般的に教師が生徒を姓名で呼ぶのは、

①出席を確認するため

表 1 教師から生徒への呼びかけ (姓名)

インフォ- マーション センター(教員)	性	年代	担当科目	学校 種別	科	学年	修業 時間	卒業生 数	生徒 数	合計	呼 名	漢 字	姓	氏 名	[姓] さん	[姓] くん	[姓] ちゃん	[姓] さん	[姓] くん	[姓] ちゃん	[姓] さん	[姓] くん	[姓] ちゃん	合計	
121	女	20	現代文	公立	芸術科	2	45	5	4	9	有	13	7	8	0	3	0	0	5	0	0	0	0	36	
122	女	20	家庭	公立	工業科	3	50	0	28	28	無	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	
131	女	30	現代文	公立	総合科	3	50	26	14	40	無	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	
132	女	30	現代文	公立	国際科	3	45	23	1	24	有	4	0	0	30	1	0	0	0	0	0	2	0	37	
133	女	30	現代文	公立	国際科	1	45	32	5	37	無	8	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	
141	女	40	英語	公立	総合科	3	50	13	7	20	無	0	0	36	0	2	5	0	0	0	0	0	0	43	
142	女	40	現代社会	公立	国際科	2	45	18	1	19	無	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26	
143	女	40	生物	公立	通信制	0	45	20	25	45	無	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
144	女	40	世界史	公立	国際科	3	45	21	4	25	無	21	8	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	30	
151	女	50	現代文	公立	国際科	1	45	28	5	33	無	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	
152	女	50	現代文	公立	普通科	2	45	22	8	30	有	19	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	14	
153	女	50	現代文	公立	工業科	3	50	1	13	14	有	5	25	9	0	13	4	0	0	1	0	0	0	57	
154	女	50	古文	公立	国際科	1	45	30	5	35	無	43	7	1	0	0	0	2	1	0	0	0	0	54	
155	女	50	現代文	公立	国際科	2	45	30	5	35	無	7	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	10	
合計								269	125	394		151	55	56	30	20	9	3	7	2	2	2	1	0	336
平均																								24.00	
221	男	20	英語	公立	国際科	2	45	0	2	2	無	0	0	2	0	0	23	0	0	0	0	0	0	0	25
222	男	20	英語	公立	総合科	2	50	12	6	18	無	26	25	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	55
231	男	30	現代文	公立	通信制	0	45	4	2	6	無	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
232	男	30	数学	公立	工業科	3	45	3	5	8	無	4	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23
233	男	30	英語	公立	国際科	2	45	16	0	15	無	31	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	35
234	男	30	数学	私立	普通科	1	50	0	44	44	有	0	0	46	0	0	3	0	0	0	10	0	0	0	59
241	男	40	音楽	公立	普通科	2	45	30	5	35	無	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
242	男	40	音楽	公立	普通科	2	50	8	16	24	有	0	0	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24
243	男	40	音楽	公立	工業科	3	50	19	4	23	有	19	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24
244	男	40	英語	公立	総合科	1	50	25	7	32	有	9	3	32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23
251	男	50	物理	公立	普通科	2	50	0	17	17	有	0	0	42	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	44
252	男	50	化学	公立	普通科	1	50	20	40	無	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
253	男	50	日本史	公立	工業科	2	50	0	31	31	無	0	20	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
254	男	50	数学	公立	定時制	4	45	2	7	9	有	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
255	男	50	現代文	公立	中学校	2	50	14	15	29	無	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
261	男	60	漢文	公立	普通科	2	50	20	22	42	無	0	70	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	70
合計								172	203	375		89	73	230	1	0	30	1	0	0	0	0	4	438	
平均																								27.38	

インフオーマントNO.について

以下本文についても同様。

②解答や朗読などをさせる生徒を指名するため

③態度や行為に関する命令・禁止・叱責などに際して注意喚起するためなどである。このうち①出席確認のための呼名をしているのは、男性6人、女性4人の10人。ちょうど3分の1の授業にすぎない。今回調査をした30クラスでは従来型の40人学級は少なく、生徒数はほとんどが30人以下で、一桁の数のクラスもある。数が多ければ出席確認の呼名だけで時間が取られるし、少なければいちいち呼ばなくても顔を見て出席の確認を行うことができる。それゆえ、決まり事としての呼名は必ずしも必要ないと考えられる。生徒数が多い場合には座席表などで欠席者を確認したり、通信制などで、固定した生徒が出席しない場合には出席カードを提出させたりする場合もある。もちろん、学期・学年の始めなどは呼名するクラスは増えるだろうし、2時間続きの授業の2時間目などでは呼名は行われないなどの、状況による違いもあると考えられる。ちなみに出席確認の呼名をしているクラスの平均人数は23.3人で、最も生徒数が少ないクラスは9人、多いクラスは44人であった。一人一人の呼名はしないものの、不在者だけ姓や名を呼んで確認する152、提出物や答案返却のための呼名と兼ねる144、154、261なども見られた。短い授業時間の中で実質的な時間確保のためにいろいろと工夫しているようすが見られる。

②③の呼名の量は授業の形態と大きく関係していると考えられる。姓名をまったく呼ばなかった4人143、231、241、252に共通するのは授業内での教師発話量が比較的多いことである。小林(2007:43)⁽²⁾によれば、授業における教師の発話量は最も少ないもので54.99%、平均が78.68%であったが、この4人については最も少ない241が88.76%で、他の3人は90%を越えている。特に252は99.46%もあり、生徒の発話は2レコードのみである。このような授業では、すでに小林(2008:87)で分析したとおり、「説明」的な内容を持つ発話レコードがほとんどを占め、生徒に質問して答えさせたり、朗読などをさせたりのやりとりがなく、また生徒の態度や行動などに教師が何らかの評価・批判をしたりアドバイスをしたりということもほとんどない。したがって、生徒の姓名を呼ぶ必要もないということになると考えられる。4人の

うち143、231は通信制の授業で生徒たちとは日常的につきあいがほとんどなく、年齢的にも学齢期の者に限らず、教師より年上の生徒もいるとのこと。それゆえ、発話の丁寧度も高く、講演のような授業が行われているのである。

2.2 呼びかけのタイプ

〔表1〕で見るとおり30人の呼びかけのタイプは次のように分けられる。

- ① 「姓」または「名」または「姓名」に「さん」「くん」の敬称をつけて呼ぶ
- ② 「姓」または「名」または「姓名」を呼び捨てにする
- ③ ①・②の混合型
- ④ 呼名をしない（このタイプについてはすでに前段で述べたとおりである）

①②③には、それぞれに姓で呼ぶ、名で呼ぶ、姓名で呼ぶ、の3つの呼び分けのパターンがある。ほとんどの生徒を名で呼んでいる教師は2人いる(132、221)。132は前任校が島嶼の小規模校で同姓の大変多いところだったゆえに、区別のためには、生徒を姓でなく名で呼ぶのが普通で、現任校でもその習慣が残ってしまっているとのこと。また221は男子2人の授業だが、このとき不在の1名を含め全員外国人で、姓が日本風のものではない。特に多数回呼ばれている生徒は韓国籍で1音節姓ゆえ名で呼んでいるようだ。この教師は20代で、男子生徒ばかりの人数も少ない授業であるゆえに丁寧体も2番目に少なく、友人どうしのような親密な口調で話している。

これ以外の名もしくは姓名による呼名で目立つのは同姓のものの呼び分けである。153は13人の男子生徒のうち3人が同姓なのでこの3人を呼ぶ場合は「(名)くん」もしくは「名」(呼び捨て)を用い、234もそれぞれ3人、2人の2組の同姓の生徒たちをのべ8回にわたって「姓名」(呼び捨て)で呼んでいる。姓で呼んだものが全体でのべ654例に上るのに対し、名または姓名で呼んだものは114例(うち132・221が合計で54例)ゆえに中学・高校での一般的な呼名は①「(姓)さん」「(姓)くん」または②「姓」(呼び捨て)と言ってよいだろう。名で呼ぶということは一般的に姓で呼ぶより親密な関係である

場合に行われたり、また親密であることを示す場合に選ばれると考えられるが、授業において教師がそのような親密さを積極的に求めているようすは見られない。クラブ活動や、課外の私的な会話などでは名やニックネームなどで呼ぶことはあるかもしれないが、授業という場は教師にとって他とは一線を画した場として意識されているのではないかと考えられる。

同様に、〔表1〕で見るとおり、あだ名（ニックネーム）、姓や名の一部など、またはそれに「さん」「くん」をつけたものなどでの生徒への呼びかけも皆無であった。また「ちゃん」などの敬称を用いた例もない。ただし、253のみに4例、同一の生徒に対して「(姓) 先生」と呼びかけた例があるが、これは教師役で発表する生徒を教師に模して呼んだものである。

なお、「さん」「くん」については、すべての教師が用いるわけではないが、用いている教師については話者の性別・年齢・教科を問わずすべての者が、女子生徒には「さん」、男子生徒には「くん」とはっきり使い分けて呼びかけているようだ。このことは「さん」のみを用いて「くん」を用いない教師の教室生徒がほぼ女子のみであり(142、233)、その逆に「くん」のみを用いている教室では生徒は全員男子である(122、253)こと、どちらも用いている場合双方の比率は男女比におおむね比例するような傾向をしめしていること、さらに実際のデータにおいて、呼びかけに答えた生徒が特定できる場合、例外なく「さん」なら女子、「くん」なら男子であることなどによる。この傾向は国研(2002: 84~85)における男女中高生が担任にどう呼ばれているかというアンケート調査の結果とも一致している。すべての生徒に差別なく「さん」で呼びかけるべきだという考え方もあり、そのような運動を行っている学校や保護者団体などもあると聞くし、実際に全員に「さん」をつけて呼ぶ教師も知っているが、2つの調査をあわせて考えるとそのような運動は、今回の調査の場となった中・高校においてはあまり实际的とは言えないようだ。男女差別をしないという考え方からすれば、むしろ全員を呼び捨てにするという傾向のほうが強い。ちなみに同じ国研の調査によれば東京の中高生の60~70%は担任から姓を呼び捨てにされたことがあり、男子高校生の51.0%はこの呼び方を好きだとしているとのことである。

次に①②③のタイプについて、その現れ方をまとめる。

① 「さん・くん」

女性：10人（－4人＝＊をつけたもの。以下同じ） 122 131 132 133＊

142 144＊ 151 152 154＊ 155＊

男性：3人（－1人） 232 243 253＊

（＊呼び捨てが1例ずつのみ混じっている）

② [呼び捨て] ⁽³⁾

女性：1人 141（ただし2例のみ「くん」あり）

男性：6人 221 234 242 251 254 261

③ 「さん・くん」・[呼び捨て] 混合

女性：2人（＋5人） 121 153 133＊ 141＊ 144＊ 154＊ 155＊

男性：4人（＋1人） 222 233 244 255 253＊

（＊は①②に既に数えたもの。1～2例程度の混合である）

おもに「さん・くん」を用いているのは女性10人に対して、男性は3人のみ。逆に[呼び捨て]である者は男性6人に対して女性は1人のみである。この男性6人はすべての呼名が[呼び捨て]だが、女性はそうではない。また、男性16人のうち11人は少なくとも1度以上[呼び捨て]を行っており、まったくしない5人のうち3人は、呼名自体をしていない。なお、男性で「さん・くん」を1度以上使用している者は7人であった。いっぽう、女性では呼名をまったくしない者1名を除き13人が「さん・くん」を少なくとも1度以上用いている。[呼び捨て]に関しては7人が1度以上行っているが、[呼び捨て]のみという者は皆無である。ここからわかるのは男性がどちらかといえば[呼び捨て]をよくするのに対し、女性は「さん・くん」をつけて呼ぶことである。

2.3 混合タイプの使い分け

まず、③にあげた、混合タイプの6人（＊のないもの）の混合のしかたにそれぞれどのような特徴があるかを述べる。（例中Tは教師、男、女、複数というのはそれぞれ生徒を指す）

121 「(姓名) くん」 5回はすべて出席確認の際に用いられている。また、8回現れる[(姓) 呼び捨て]が丁寧体とともに用いられた例はない。「(名) さん・くん」は丁寧体とも、常体とも用いられている。

153 促す呼びかけは「さん・くん」で行い、言及(引用例)は[呼び捨て]にする。

T 1 これは、どう思ってるってこと?

T 2 [名字] さん、どう思ってるってこと?

T 3 [名前] くんどう思ってるってこと?

T 4 生き続けてきてくれた、って書いてある。

T 5 [名字] くん、どう思ってる?

男 うれしい。

T 6 うれしいと思ってる。

T 7 ありがたいと思ってる。

T 8 [名前] が、わたしを殴ってくれた、って言わないでしょ。

複数 (笑う)

222 直接的な呼びかけ、言及用法ともに「さん・くん」だが、例外的な[呼び捨て]例は授業内容とは直接関係のない内容での直接的な問いかけである。「余裕ですね」という丁寧体発話とも、ともに用いられている。
3場面での例をあげる。

T 1 [名字]、余裕ですね、もう終わった?

T 2 調べた?

T 1 [名字]、どうした、保健室行ってた?

T 1 [名字] くん、どうぞ。(回答を指示)

T 2 じゃ、今度はリーズン(reason)というのは、[名字] さん、どういう意味でしょう。

233 女子のみのクラス。基本的に「(姓)さん」だが4回のみ[(名)呼び捨て]、これはすべて授業に関する質問を出し答えを促す発話である。

244 出席のための呼名のみすべて[(姓)呼び捨て] 他はすべて「(姓)さん・くん」

255 呼びかけ(注意・叱責)は「くん」、言及(「～説」)は[呼び捨て]

T 1 はい、はい、静かにしといてくださあい。

T 2 [名字] くん、足い。 (「足い」は「あしい」と伸ばして言ったもの)

男 はい。

T 3 [名字] くん足。

T 4 口を閉じる。

T 1 ちょっと手を上げてもらいましょう。

T 2 はい、[名字] 説、えー、種を割って中の核を食べるという、そういうことだという人。

T 3 あはは(笑)

T 4 はい。次、えー、[名字] 説。

(255に関しては呼びかけはこのほかに「みなさん」1例のみ。自称はない。通常は発表の指名を班名で行っている。)

次に典型的な混合タイプではないが、特徴的な使い分けが見られるものをあげる。

141 女性で唯一[呼び捨て]タイプであり、2例のみ「くん」を用いている。

いずれも直接呼びかけて、注意を促したり叱責したりしているが、すぐに[呼び捨て]に戻る。以下の例では、[呼び捨て]はすべて言及用法であるが、[呼び捨て]で直接に呼びかける場合もある。

T 1 でも、今日、みんな、みんなっていうか、おおぜい休みだね。

T 2 悪い、[名前] くん、ちょっと、え。

T 3 じゃあ、そこは、誰がいないんだっけ？

T 4 はい。

- T 1 すいません、隣の〔名字〕に渡して。
- T 2 あと〔名字〕のところにもね。
- 複数 (笑う)
- T 3 〔名字〕、どうしたかね。
- T 4 〔名字〕と〔名前〕と。
- T 5 〔名字〕もないの。
- T 6 はい、じゃ、今日のところ、セクション・スリー、四十二ページ。

(携帯の音)

- T 1 〔名前〕くーん。(笑)
- T 2 〔名前〕ってすごいよね、やっぱりねえ。
- T 3 絶妙のタイミングですごいことやってくれるよね。
- T 4 本当にびっくりした。

- 133 「さん」を最も多く用いるが、不在の生徒の確認で、最初は「さん」、さらに繰り返しよびかけて「呼び捨て」にしている。

女 どのくらいで学級閉鎖になるんですか。

- T 1 えー、おんなじ伝染病で、何人ぐらいだろうねえ。

複数 ***、わかんない。 (***)は発話不明部分。以下同様)

- T 2 はやる気配があつたらじゃない？

- T 3 〔名字〕さんか、あと。

- T 4 〔名字〕。

- 144 通常は「さん・くん」。小テスト答案返却時によくできた生徒の名を〔(姓名) 呼び捨て〕で繰り返している。

- T 〔名字〕さーん、お、やるね、〔名字・名前〕。

- 154 出欠確認時、「さん」を用いた呼名に返答がなかった生徒を、全体に確認する言及的な用法で「呼び捨て」にする。

T 1 〔名字〕 さーん。

T 2 〔名字〕 お休み？

155 朗読者を指示する場面で、まず「呼び捨て」、つぎに「くん」をつけ呼名する。

T 1 はい、では、えっと全部最後まで一回読んでしましましょう。

T 2 じゃあ、その次は、えー、〔名字〕。

T 3 〔名字〕 くん。

253 「呼び捨て」は1例のみ現れる。同一名を3回繰り返しているが、2回目は「呼び捨て」。「くん」で直接に呼びかけて返事がなかった生徒を確認するやや言及的とも言える言い方で「呼び捨て」にしている。さらに再度の呼びかけでは「くん」を用いる。

T 1 〔名字〕 くん？(生徒笑う)

T 2 やる？(間4秒)

T 3 〔名字〕 どこにいるの。

男 *****。

T 4 えー、〔名字〕 くん、やるかい？

男 いや、やらない。

「さん・くん」と「呼び捨て」には特に定まった使い分けの傾向は見られないようである。混合して使う場合、おもに「さん・くん」を用いている者が、授業からやや離れた内容で「呼び捨て」を用いたり、逆に「呼び捨て」中心のものが叱責を「くん」づけで行ったりということからは「呼び捨て」にある種の親しみを表出する場合もあれば、逆に「さん・くん」に緩和作用を求めるということもあり、それは教師それぞれが通常おもに使う形式と、使わない形式の間でそれぞれの感覚で呼び方を選んでいるということだろう。

ただし全体的な傾向としては、混合型の場合は直接的な呼びかけよりは言及的用法において「呼び捨て」が用いられるということと、繰り返しの中で

〔呼び捨て〕が用いられる傾向があるということが言えそう。また呼名は〔呼び捨て〕、それ以後の指示などは「さん・くん」づけで行う例があるということから見ると、おもに「(姓)さん・くん」を使う教師の中には、〔呼び捨て〕に対する、公式性というか堅さのイメージがあり、それを緩和するために「さん・くん」を用い、逆に引き締めるために〔呼び捨て〕を用いるという意識があるように思われる。

3. 自称・対称代名詞

〔表2〕は対称代名詞による呼びかけおよび、教師の自称についてまとめたものである(次ページ)。

3.1 対称代名詞による呼びかけ

〔表2〕に見るとおり、対称代名詞による呼びかけは少ない。いわゆる代名詞のほか、「あなたたち」「きみたち」に置き換えることが可能と考えられる「みんな」「みなさん」などの呼びかけ、また教材の登場人物の発話などの引用として現れた対称代名詞を含めても、1人が1単位時間に発するこれらの呼びかけは平均9.6回にすぎない。さらに、このような引用などをのぞき、直接に相手に呼びかけたもの、また教室にいる生徒をさしての言及に用いられたもののみを考えると、出現状況はつぎのとおりである。

女性：あなた（1人2例）153	あんた（2人2例）153・154
きみ（1人1例）153	おまえ（1人1例）153 計2人6例
男性：あなた（2人2例）222 231	あんた（1人1例）233
きみ（7人20例）232 234 241 244 252 255 261	
おまえ（3人3例）233 234 241	計10人26例

女性の場合、153が4種5例の対称代名詞を使っているのが目立つが、それ以外には154の「あんた」1例のみで、他の12人は対称代名詞をまったく用いない。153、154は〔表1〕にも見るとおり、姓名による呼びかけも女性の中では最も多いし、特に153は多様な呼び方をしているという点において特徴的であると言える。

表 2 教師から生徒への呼びかけ (対称代名詞・自称代名詞)

教師	生徒		妻側の対称詞										教師の目標詞										合計																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
	女	男	あな たち	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た	あな た

女性よりも男性のほうが対称代名詞をよく使っているが、殊に「きみ」がよく用いられているのが目立つ。特に232(8例) 261(7例)は複数回の「きみ(たち)(ら)」を用い、これ以外の対称代名詞は併用していない。また「おまえ」の使用者3人はいずれも「きみ」も用いている。小林(1997・2002)による職場の調査では「きみ」という呼びかけはそれぞれ1例ずつしか現れなかった。しかし国研(2002:84~86)でも高校生では男女ともに担任から「きみ」と呼ばれることが多い(男子18.6%、女12.5%)とされており、これは高校での特徴的な呼称といえるかもしれない。同書では「心理的な距離が相対的により大きくかつぞんざいではない『キミ』が男女ともに(中学生より)増加する」のだと言っている。

3.2 自称代名詞の使用と、対称代名詞との対応

〔表2〕で見るとおり、自称代名詞の使用の状況も男女でははっきり分かれている。女性の場合、引用でなく自分のことを相手に向かって言及するために使った自称代名詞は104例あるが、すべてが「わたし」であり「あたし」や「わたくし」などは現れない。121、131は「わたし(たち)」を1例も用いていないが、そのほかの12名は複数回用いている。いっぽう、男性では「わたし(たち)」16例、「ぼく(たち)・(ら)」30例、「おれ(たち)・(ら)」29例と、3つの自称が用いられ、中でも男性専用形式である「ぼく」「おれ」が「わたし」よりもよく用いられていることがわかる。

男性で「わたし(たち)」のみを使用し、「ぼく」「おれ」を用いないのは231ひとりだけである。この話者は対称詞・呼びかけも「あなた」1例および「みなさん」のみであり、発話の丁寧度も68.08%と全発話者中2番目の高さである。この話者は前述のとおり通信制の教員であり、自称・対称の選び方においても改まった態度を崩していない。

「おれ」のみの使用者は221、222、241、243の4人である。中で20代の2人が2人とも「おれ」のみを使用していることが注目される。彼らによって用いられる対称詞は「あなた」(222)「おまえ」「きみ」(241)であり、他の2人には対称詞は現れない。

「ぼく」のみの使用者は254のみで、「おれ」とは逆に比較的高齢である。この話者においては、呼称は「みんな」4例のみである。

なお、特に小学校などでは教師自ら自分をさして「先生」と呼ぶ場合があるが、今回の調査では、そのような例は1例も見られなかった。自分をさして、相手からの呼びかけの引用として用いているものが男女合わせ5人9例ほど見られただけである。たとえば、以下のようなものである。

153

T たたとえば、みんながわたしのことを、先生としはいくつ？結婚してるの、してないの、こどもはいるの、いないの、そういうのは好奇心ですよ。

3.3 引用としての自称・対称代名詞

ところで、引用として自称詞や対称詞が使われる場合、実際に目の前にいる相手（生徒）を指したり、彼らに自分を指して述べたりするのはかなり違った様相があらわれる。特に国語、英語、歴史などの授業では、フィクションを教材として使ったり、歴史上の人物のエピソードなどがよく語られるが、このような談話にはその登場人物の発話が引用の形で現れることが多い。本調査でも131、241などが多様な引用をしていた。

131は国語の教師で『こころ』（夏目漱石）を教材として授業をしている。以下の例131-1の「ぼく」「きみ」は本文の引用で、主人公や友人Kの用いる「僕」「君」という自称・対称をそのまま引用している。131-2でも「わたし」は主人公の「先生」の自称として現れるものをそのまま引用しているのであるが、T1「おまえ、ちょっとひどくね？」T4「あんたが言ってることはどうしたよ」T8「おれ、それでいいのかと、バカといわれちゃったよ、どうしよう」T9「ほんとにバカかよ、ぼく」などは、登場人物の気持ちを、現代の高校生の口吻を使って言い直したところで、「あんた」「おまえ」「おれ」や、また原文の単なる引用とは言えない「ぼく」などが現れる。これらの語は例文以外の箇所も含め複数回使われている。

131-1

- T 1 今がチャンスだって状態になっちゃって、やめようとか言って逃げ腰になってるところに、さらにガツンと追い討ち。
- T 2 で、言ってることが、やめてくれって、ぼくが言い出したことではない。
- T 3 もともときみのほうから持ち出した話じゃないか。
- T 4 で、しかし、きみがやめなければやめてもいいが、ただ、口の先でやめたって仕方があるまい。

131-2

- T 1 もしケイがこの段階で、おまえ、ちょっとひどくね？とか言ってたら、あ、ごめんとか言ったかもしれないけど、ちょっとひどくねとか、それすらも言えなかった、というのがあります。
- T 2 だから、なんでそこまで言っちゃったのかは、それからわたしがケイを、弱者でしかも羊にたとえる。
- T 3 羊にたとえられちゃってるケイです。（間7秒）
- T 4 まず一つ、その前の段落から引っ張ってくるけれども、（間2秒）普段あんたが言ってることはどうしたよ、と言われてしまいましたよね。（間21秒）
- T 5 まずはこの状態。
- T 6 ちょうど、あの、わたしがこういう状態だよというとき。
- T 7 大変差し迫っているもの。
- T 8 わたしのほうに矛盾をがくんと指摘されちゃったんで、おれ、それでいいのかと、ばかとか言われちゃったよ、どうしよう。
- T 9 でも、ほんとにばかかよ、ぼく、とか思ってる状態、というのが今のケイ。

（傍線は筆者による）

このような例にも現れ、また〔表2〕からも読みとれるのは、男性のことばとして引用されている「おれ」（11人29例）が目立つことである。実際には自称として「おれ」を使うことのない女性も含め、男性は「おれ」を使うことが多く生徒にもそれは受け入れられやすいという認識があるのだと考えら

れる。

3.4 自称・対称代名詞の使い分け

最後に、名前による呼び方や対称代名詞を多様に使い分けているという点において特徴的な153の授業の一部をとりあげ、使い分けの基準がどのようなものか考えてみる。

153

T 1 わたしたちはここでなにを思わなくちゃいけない？

T 2 ここまで読んだあと、わたしたちはここでなにを思うことになる？

T 3 なにを思うことになんの？ここまでの。

T 4 次の赤をみなさん考えて。

T 5 なにを思うの？ここで。

T 6 [名前] くん、なにを思わなくちゃいけないの？

T 7 今、あんたたち思ってることはなんなの？

男 おれらが今思ってること？

T 8 そう。

男 早く学校おわんないかな。

T 9 いや内容について思ってることに決まってるんだろ、おまえ。

複数 (笑う)

この場面で153はまず、自分と生徒たちを含めた形で「きみたち」とか「みなさん」に代わる「わたしたち」を用いて生徒に問いかける（T 1・T 2）。はかばかしい返答がないので「みなさん」と、自分を相手から切り離し（T 4）、さらに指名をする（T 6）。T 7ではやや質問調にたたみかけ、ここでは「あんたたち」を用いる（T 7）。本文を読んだ読者がどう思うような書かれ方をしているのか、というのが初期の問の意味だが、このことを「今思っていることは何か」と言い換えたため、答えられない生徒から質問をはずすような回答を導き出してしまい、たしなめるのに、それまでの調子を崩して、「男ことば」を用い、「おまえ」と呼びかける（T 9）。ただし次に生徒たちが

笑っていることから、ここでは真面目な叱責というより冗談的な親近感のある言い方として乱暴とも言えることばが使われているのである。153のこの授業はたたみかけるように質問を繰り返し、答えを導き出そうとしているが、同じ質問の言い方を変える一つの戦略として、相手の状況や反応に応じてさまざまな対称詞を繰り出しているのである。すべての教師に共通する対称詞（や自称詞）の選定の基準をあきらかにするのは難しいが、生徒とある距離をとるときにはより改まった丁寧な形式を、親しみを感じさせたいときには生徒が友達どうしで使う（と教師が考えているような）という具合に、あるいは変化をつけるためにそれらの言い方を織り交ぜるというようなことば選びをそれぞれの教師はしているであろう。

4. まとめ

名前や対称代名詞で相手に呼びかけるということは（呼びかけないという選択も含め）相手との距離をどのようにとるか、ということである。本調査の結果を概観すれば、もちろん例外や使い分けの工夫などはみられるものの、教師から生徒への呼びかけはおおむね「(姓) さん・くん」か「[(姓) 呼び捨て]」である。「さん・くん」をつけるのはおもに女性教師、「呼び捨て」は男性教師で、「さん」で呼ばれるのは女子生徒、「くん」は男子生徒。対称代名詞としては「きみ」以外はあまり使われず、自称詞は女性は「わたし」、男性は「ぼく」「おれ」も使うということになる。これは日本語の自称・対称の男女のステレオタイプとされた言い方とほぼ一致している。保守的・伝統的な選択の域を出ず、また非常に親しい関係で使われるようなくだけた言い方もまったく用いられてはいない。

多くの教師は、常に改まった丁寧なことばのみで授業しているわけではないが、少なくとも呼びかけの面では、生徒に受け入れられつつ一定の距離を保つという意識をもって呼びかける語の選択をしているように見受けられる。そのために、比較的改まった、ステレオタイプな呼びかけを用いているのである。これは男性教師でも女性教師でも共通した感覚であるように思われる。

相手を自分との関係に置いて直接に指し示すという日本語対称詞とそれ

に對置・共起するものとして選ばれる側面もある自称詞ゆえに、ステレオタイプではない言い方は選ばれにくい。選ばれるとしても話者（この場合教師）が対者（生徒）をリードしてことば選びを比較的自由にできる関係にあり、かつ、話者がどのように選んだとしても対者の受容が保てるような関係が両者の間にできている（と話者が判断している）、そのような関係おいてのみと限られるようだ。その効果も両者の関係の上に成立するものであり、普遍的なものとは言えないだろう。

注

- (1) 小論中に掲げる三桁の数字はすべて協力者である教師につけた識別番号である。詳細については〔表1〕を参照されたい。
- (2) データについてはその後の調査により一部微調整した部分がある。
- (3) 小林（2007:43）の「姓」「名」「姓名」を呼び捨てているという呼名方法を表すものとして小論では〔呼び捨て〕と表記する。

参考・引用文献

- 国立国語研究所（2002）『学校の中の敬語 1 アンケート調査編』（国立国語研究所報告-118）
- 小林美恵子（1997）「自称・対称は中性化するか？」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 小林美恵子（1998）「学校の呼称－女性教師の呼称『〜クン』を中心に」『日本語学』17-9 明治書院
- 小林美恵子（2002）「職場で使われる『呼称』」現代日本語研究会編『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- 小林美恵子（2007）「授業談話データベースによる実態調査－授業の発話の丁寧度について」『ことば』28号 現代日本語研究会
- 小林美恵子（2008）「授業談話データベースによる実態調査－授業の構成要素と丁寧度」『東京都立国際高等学校研究紀要』11号
- （こばやし みえこ・東京都立国際高校）